



國定
新讀本の研究

八十代著

高等第二學年

東京
學海指針社

教科
42
250

43199

教科書文庫

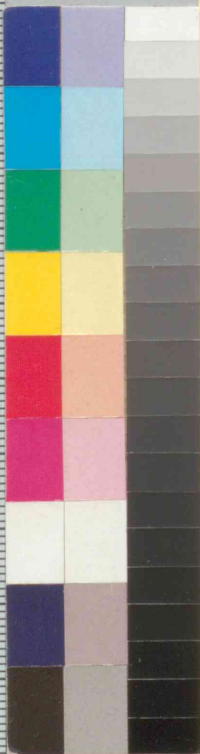
4

810.

42-1911

25000

15107





豐田八十代著

高等第一學年

國定新讀本の研究

縣第四〇六号
和漢語
一部冊數一

東京 學海指針社

810 類
168号

廣師男堂藏書號
15107
第897号
正号

教科書文庫

4

810

42-1911

2500015107

定國新讀本の研究 (高等第一學年)

豊田八十代著

高等小學讀本卷一

第一課 艦上の威仁親王殿下

海軍部内に於ける美談である。殿下の御職務に御勵精遊ばされたことが一篇の眼目となり、これによつて國家的精神を養はうとするので、折しも風さへ加りて、猛雨斜に飛ぶ云々の一節に、最も筆力がこもつてをる。

この話は、谷干城氏の精神教育談として、多くの國語讀本に轉載せ

広島大学図書

2500015107



られ、時の農商務大臣谷干城氏が、歐洲から歸朝の際、地中海のアレキサンドリヤ港に於て、威仁親王殿下を英國の旗艦ヴィクトリヤ號に訪はれたやうにしてあるが、取調の結果、事實に相違のあることが明になつたので、殿下の御附武官の校閲を経て、本文のやうに修正されたといふことである。

金枝玉葉、こがねの枝玉の葉の意で、帝王の子孫を稱するに用ひる。この語は、古今註に、黃帝蚩尤と涿鹿の野に戰ふ。常に五色の雲氣金枝玉葉の如きあり。帝の上に止まる。とあるのから出たので、原文はうつくしい雲を指してをるから、ことは用ひ方がちがふ。

嚆矢、かぶらや、射の初にかぶらやを射て、的の遠近を定めたところから、物事の端緒の義につかふ。莊子に焉知曾子之不爲桀紂之嚆矢哉。とあるのが、その出處である。

副直勤務中の少年士官、砲艦等の小艦を除く外は、當直をなすものは太尉で、中少尉が副となるのがきまりである。

威仁親王殿下は文久二年の御生誕であるから、明治十二年は十八歳の御時に當つてをる。殿下の御略歴は次の通り。

故一品幟仁親王第四の王子で、文久二年正月十三日御生誕。明治二十八年御兄宮熾仁親王薨去の後その御跡を御繼になつた。御少年のときから海軍に御はいりになつて、明治十年頃英國に御渡航、同地の海軍兵學校御卒業後英國軍艦に御乗組御練習。明治十三年始めて我が海軍少尉に任ぜられ、二十七八年の役には松島艦長として御出征、三十七年海軍大將に御陸任になつた。

第二課 足柄山

有名なる足柄山の笙の音の話を韻文にしたもので、勇敢なる日本武士の風流を叙し、趣味を養はうとするのである。作者は石原和三郎氏。出處は古今著聞集。

まさきくあれは機嫌よくといふに同じ。

義光の傳は大日本史卷百四十三に次のやうに見えてをる。

義光は伊豫守頼義の子なり。元服を新羅明神社に加へ、新羅三郎と稱す。幼にして弓馬を能くす。長じて勇悍智略あり。左兵衛佐となり、京師に宿衛す。兄義家、清原武衡等を撃ちて、利あらずと聞き、官を辭して、陸奥に赴き、義家を援けて、金澤柵を圍む。中略 義光幼にして音律を好み、笙を豊原時元に學ぶ。時元卒するとき、其子時秋尙ほ幼にして、秘曲を傳ふることを得ず。乃ち義光に授く。義光陸奥に赴くに及び、時秋追ひて足柄山に達す。義光轡を駐めて、

其の歸府を諫す。時秋猶ほ従はむことを請ひて已まず。義光稍々其の意を曉る。乃ち二楯を布いて、俱に坐し、胡籙中より時元傳ふるところの大食入調の譜を出し、之を示し、悉く秘曲を之に傳へ、篤く諫して歸らしむ。

第三課 眞の知己

ファイフチー、フェーマス、ストーリーズ Fityfamous stories といふ書に見えてをる話であるが、同書は三士忠造氏の譯文かあつて、西史美談として發行されてをる。

相信じて疑はないといふのが一篇の眼目で、議論を叙事に冒らせてある。

國王、原文には Tyrant Dionysius としてある。

此の時早く彼の時遅く、その瞬間にといふに同じ。

第四課 故郷

故郷を愛するるとともに、又海外に雄飛すべきことを教へるので、第一節は故郷の慕はしきこと、第二節は故郷の慕はしき所以を説き、第三節は故郷の意義を明にし、第五節は故郷を愛する情の故郷を遠ざかるに随ひて強さを加ふることをいひ、第六節に及び、盛に海外に雄飛すべきことを説いてをる。

錦を衣て、史記の頃羽本紀に富貴不歸故郷如衣錦夜行とある。

骨を埋むる豈た墳墓の地のみならむや、釋清狂の壁書の詩で、全文は、男兒立志出鄉關、學若不成死不還、埋骨豈期墳墓地、人間到處有青山。といふのである。

第五課 布哇通信

前課に連絡して、布哇出稼人の状況を示さうとするので、全く本國に在るが如き心地致居候の一句が一篇の眼目となつてをる。

布哇は北太平洋にある十餘の群島で、横濱から三千四百四十五哩を隔てゝをる。十九世紀の初から王國であつたが、千八百九十三年の革命後共和制となり、九十八年明治三十一年遂に北米合衆國に合併されてしまつた。

伯仲、相匹敵することをいふ。伯は一番めの子、仲は次の子のこと。領事とは本國の經濟上の利益を圖る目的を以て、外國に駐劄するもので、總領事とは、普通の領事よりは比較的廣大なる管轄區域を有し、自己の管轄區域を數分したる其の各部に駐在する普通の領事を

直接に監督する權能を有するものである。

横濱正金銀行、横濱に在り、普通の銀行業務の外に、外國爲替を取扱つてをる。明治十三年二月の創立で、不換紙幣のみ流通して、一般の取引に紙幣を用ひた際に當り、特に資本金を正金(銀貨)で募集し取引も正金を以て行つたので、正金銀行と命名したのである。十七頁の挿繪は、椰子樹の生ひ茂つたところを示してをる。

第六課 公園

公園の目的成立必要を示し、且著名な公園を紹介するのが主眼であるが、公園に遊ぶときの心得を附説することも、もとより大切である。

ハイドパーク、倫敦には二十餘の公園があるが、ハイドパークはそ

の最大なもので、長さは十二町に餘り、創立が極めて古い。この公園は風景が他に勝れ、老樹の枝を垂るゝあたり塵なく兎眠り、朝夕に集ひ來る紳士淑女の馬車は木の葉の數よりも多い。ポアドプロロニユ、ポアード、プロロニユは巴里公園の最大なもので、市の西方に在り、面積が我が一里四方に餘つてをる。古はマドリッド及びノミュエツト、バガテールなどいふ人の城廓があり、又アベイト、レンシヤンといふ寺などもあつたが、千八百五十二年に

時の政府から市に讓與して、最も清潔な公園としたのである。チーアガルテン、ブランドプールの西方とスプレイ街の北方と南方ポツダムの舊村落との間に跨り、縦千八百五十メートル、幅七百五十メートル乃至千百メートルに及んでをる。この中には數多の記念碑彫像があるが、中にもフレデリック維廉三世の像、ルイズ皇后

の像などは有名なものである。以上三公園の特色をいつて見ると、ハイドパークは宏大深遠な點を以て優り、ボアドブトロニユは磊落艶麗な點を以て優り、チーナガルテンは健雅幽邃な點を以て優つてゐるので、自から三國人の氣風が見られるのである。

中央公園、ニューヨークの島の殆ど中央に位し、八百四十八エーカーの面積を有し、長さは二哩半、廣さは半哩。千八百五十八年に設立されたので、アレキサンドリヤから持つて來たオベリスクが其の前面に立つてゐる。

借樂園、又常磐公園ともいふ。元藩主遊息の園で、天保十年に烈公が開かれたのである。園の西に好文亭といふのがある。園の廣さは東西二百間、南北六七十間、借樂の二字は孟子の語である。

兼六園、金澤城の東南なる山崎に在る。舊藩主の別荘であつたが、近年公園として金澤神社を置いたのである。兼六は六勝を兼ねるといふ意で、宋の李格非の洛陽名園記に取つて、白河樂翁公の名づけたものである。

後樂園、舊藩主池田氏の別墅、貞享中の創立、廣さは三萬二千坪、旭川の水を引き、樹石を案排して景趣をなしてゐる。後樂の名は宋の范文正公の岳陽樓の記から出てゐる。

栗林公園、もと高松侯の別荘で、高松市の南栗林村にある。南山の下にあつて、幽邃深奥、天成の如くである。

以上四公園の特色をいつて見ると、借樂園は衆人と樂むといふことを主とし、兼六園は風光を賞するといふことを主とし、後樂園は園を隔て、農事を察するを主とし、栗林公園は雅趣を以て優つてゐる。

挿繪の兼六園は琵琶湖に象つたところで、前面のが瀨田の唐崎である。偕樂園の向ふに見えるのは好文亭で、その前は一面の梅林である。後樂園は中の島を示し、栗林公園は五葉松を示してをる。

第七課 頼山陽

山陽遺稿のおしまひに、山陽先生行狀といふ文があつて、門人江木戩氏の作であるが、それがこの文の出處である。山陽は史家としても詩人としても有名であり、又孝心の厚かつたことは勿論であるが、一篇の主眼とするところは、その忠君の念に厚かつたことであるから、山陽の事業が維新の大業に關係の多いことをも説き示すことが必要である。

十三歳の時一詩を賦す、山陽詩鈔の卷の一に載つてをる詩である。

癸丑歲偶作といふ題で、十有三春秋。逝者已知水。天地無始終。人生有生死。安得類古人。千載列青史。といふのであるが、柴野栗山がこの詩を見て、激賞したといふことが、山陽遺稿に載つてをる。

青史は歴史のこと、青の字を用ひるのは、昔は青い竹簡に文字をかいたからである。青史の二字は、歐陽修の文に名聲已光青史上とあるのが本であらう。安はどうかしてといふ意。

五更、午前四時頃。

日本政記、十六卷、神武天皇から後陽成天皇まで、百八世二千年間の編年史である。綱紀の弛張、教化の隆替を叙し、自家の論斷を加へてをる。山陽の晩年の著。

父名は惟完、號は春水、廣島藩の儒臣。

母は梅颯女史、飯岡氏。

談楠公の事に及びとあるは、病中に猪飼敬所翁が訪ねて来て、南北正闘のことに關して、意見の合はなかつたことをいふのである。激越、はげしくたかきこと、東坡の詩に、激越蕩乾坤とみえてをる。

第八課 關が原合戰

未曾有の大戦役たる關原の戰を授けるのが目的で、參謀本部編纂の關が原戰史に據つてかいて、史料編纂官田中義成氏の校閲を経たものである。形式の方面ではこれによつて、文の布置、戰況の記述法等をも教へることが出来る。第一節は冒頭、第二節は西軍の布置、第三節は東軍の布置、第四節以下は戰況で、秩序が整然としてをる。大谷吉隆を吉繼としたのは、關が原戰史に據つたのである。長束、ナヅカと訓む。

寺澤、戸川、寺澤廣孝、戸川達安。
二十九頁の挿繪は、關原戰史の附圖を省略したものである。

第九課 武器の變遷

太古より現時に至るまでの武器の發達の狀況を知らしめるのが主眼で、二段に分かれてをる。第一段は戰法の變遷を説いたので、第一節は石器時代、第二節は刀劍時代、第三節は銃砲時代である。第二段は武器の變遷を説いたので、第一節は古代と近古、第二節は徳川時代、第三節は今の世の陸戰、第四節は海戰で、末節に至つて、全文を結束してをる。歐羅巴の歴史家には火藥の發明を以て云々、その人名は不明であるといふことである。

造砲の方法を研究せし愛國者、高島秋帆・江川坦庵等を指す。白兵の接戰、拔劍して戰ふこと。

機關銃、裝填發射ともに自動的で、連続して、多數の彈丸を發射し得る小銃である。これには、マキシム・ホツチキス等の種類がある。

山砲、野砲と同口径の火砲で、野砲・重砲の通行し得ざる山地に使ふ。それ故、砲身の重量を軽くし、必要に臨み、砲架と離し、馬背に載せて、運搬することの出来るやうにしてある。

野戰砲、野戰砲兵の使用する火砲で、口径は七珊米突内外、重量は

軽く、運動が容易で、大なる發射の速度を備へてをる。攻城砲、要塞の攻撃に參與せしめる火砲で、九・十二・十五・二十二珊等の口径を有してをる。

三十五頁の挿繪は、右が矛、矛の下のが、くぶつちの太刀、左の上

が重藤の弓、その下が箆、箆の下が弦まきてある。

三十六頁のは、右は盾と薙刀と太刀、左はかぎ鎗と種子島銃。

三十八頁のは、右は要塞砲二十八珊榴彈砲、中は機關銃、左は三十

年式歩兵銃。

四十頁のは、敷設水雷と魚形水雷と砲塔並に砲であるが、仕切りをしたのは、大きさの割合の違ふためである。

第十課 日本海

今後我が國運の發展と共に國防上・通商上・産業上益々重要なる舞臺となるべき日本海を紹介するのが主眼で、文體は記事文である。

第一節は位置、第二節は海岸、第三節は通商、第四節は軍事上の價

値、第五節は漁利、第六節は日本海の過去及び將來を説いてをる。

明太魚、めんたいと訓む。大口魚の一種。

第十一課 西比利亞鐵道

紀行文のかき方を示し、西比利亞鐵道を紹介するのが主眼で、櫻井鷗村氏(肉彈)の著者櫻井忠温氏の兄の歐洲見物といふ書に據つてをる。歐洲見物は鷗村氏が開國五十年史の英譯を倫敦に於て出版する用向を帯びて、明治四十一年に歐洲に赴いたときの紀行である。

ボギ一貫通式、四個又は六個の車輪を一の框で連結したもので、中央の樞軸の周りに車體が水平に自由に動くことが出来る。固定軸の距離が長いときには、車軸の軌條が曲線部を通過するときに不正を起す虞があるので、これを使ふ。

忘るな草、Forget me not. 濕地に産し、九吋乃至二十吋ぐらゐに生長す

る多年生の植物である。葉は細長く、黄色の心のある淺綠色の小さい五瓣の花を開く。人に別れるときなどに贈物にすることが多いといふことである。

十里人煙を見ず、三體詩の唐の韓偓の句に、千村萬落如寒食、不見人煙空見花。といふ句がある。

小鳥に巢を興ふるものなりとはやさしき心ならずや、原文には、この下に、露國人の動物を愛することは、家畜の順良なるによつても知られる云々の語がある。

露曆は露西亞の曆で、日本の曆とは十三日の差がある。それは、四百年毎に一回づゝ閏を省くべきであるのに、露曆はそれを省かず、四年毎に閏を置いて来た結果である。

第十二課 ベートル大帝

舊い讀本の文に大修正を加へ、箕作元八氏の校閲を経たものである。露國中興の英主と稱せらるるベートル大帝を紹介するのが主眼であるが、帝が船と水とに深い興味をもつてゐたといふのが一筋の骨子となつてをる。

第十三課 風

文部省の懸賞募集の歌詞で、第一齣は風の山中を吹き渡るさま、第二齣は風の平地を吹き渡るさま、第三齣は風の朝の景、第四齣は風の夜の景を叙してをる。

第十四課 太田道灌

太田道灌の文雅風流のたしなみのあつたことを示すのであるが、諸書に散見する事實がよせ集めてある。道灌の傳は野史に見えてをるが、その原文は山吹の話は艶道通鑑に見え、武藏野の話は松窓漫録、武者物語抄に見え、濱千鳥の話は永亨記に見えてをる。七重八重花は咲けども、は、後拾遺集雜の部に見えてをる中務卿兼明親王の歌で、小倉の家に住みはべりける頃雨の降りける日簑かる人の侍りければ、山吹の枝を折りてとらせ侍りけり。心もえてまかり過ぎて又の日山吹の心もえざりしよしいひおこせて侍りける返事にいひ遣はしけるといふ詞書がある。かつて將軍義政に見えんとて上京せし時、寛正五年のこと。

或時の戰に、これは文明十五年十月上總の廳南の城を攻めたときのことである。

遠くなり近くなるみの濱千鳥、この歌は曉月法師の作だといふことである。曉月法師は後醍醐天皇の頃の人。

第十五課 都會と田舎

坪内雄藏氏の國語讀本に見えてをる評論文で、第一節は都會と田舎との利害得失を總説し、第二節第三節は都會、第四節第五節は田舎を説き、第六節に及んで都會に出づべき場合と田舎に留まるべき場合とを示してをる。現時のやうに人民が次第に都會に集まらうとする時代に於ては、この課の如きは最も注意して教授すべきであらう。

第十六課 水遊び

趣味を養はんがための寫生文で、第一節は舟遊、第二節は魚釣、第三節第四節第五節は貝拾、第六節は水泳を叙してをる。

平泳ぎ、腹を下にし、うつぶしになつて、平に泳ぐので、長時間水面に浮ぶことを主とする。船の覆つたやうな場合に役立つことが多い。

横のし、體の側面を下にし、横にのしつゝ進むので、長距離の游泳に用ひる。

抜き手、腹を下にして、斜に水中に立ち、手を抜きつゝ泳ぐので、競争して早く泳がうとする際に用ひる。

第十七課 資本

經濟に關する材料で、第一節は資本の意義を明にし、第二節は資本の種類、第三節はその相互の關係を説き、第四節は生産的の事業、第五節は營利資本、第六節は營業と資本の關係を説いてをる。

第十八課 盲啞學校

坪内雄藏氏の國語讀本にも見えてをる話であるが、もとは杉谷代水氏の譯した以太利人の學童日誌(春陽堂發行)に出てをるので、東京の盲啞學校のことをかいたのではない。

盲啞學校の狀況を紹介するつが目的であるが、これによつて、學校の様子をかく文例を示すことも出来る。點字は佛國官公訓盲院の卒

業生ルイイ、ブレイユの工夫になつたのを、盲啞學校教員石川倉治氏が本邦の假名に適用したのである。

第十九課 言語

言を慎むべきことを教へるのが主眼で、第一節は言を選ぶべきこと、第二節は激情を制すべきこと、第三節は失言を戒むべきこと、第四節は忠信を主とすべきこと、第五節は大言壯語すまじきこと、第六節は博識を衒ふまじきこと、第七節は人を見て言を發すべきこと、第八節は人と語る際の心得、第九節は諛言に耳を貸すまじきことを説いてをる。

與に言ふべくして、論語衛靈公篇の語。子曰。可與言而不與之言失人。不可與言而與之言失言。知者不失人。亦不失言。人を失ふとは人に知られ

ずして、友を御がたいのをいひ、言を失ふとは言葉の無益に費されるのをいふ。

巧言令色鮮矣仁。論語學而篇の語。

人の言を易くするや。孟子離婁の篇の語、人が容易に言ふのは、其の言につきて責を負はず、失言あるも頓着しないからであるといふ意。

良藥は口に苦けれども、說苑正諫篇に孔子曰。良藥苦於口利於病。と見えてをる。

第二十課 熱帯地方の果樹

熱帯地方に産する特殊なる果樹を紹介するのが目的で、頭括式の説明文である。

半熱帯、熱帯に近いところをいふのであるか、緯度の何度から何度までといふ精密な限界はない。

橘の枳に化する例、支那の南方の橘は北方へ移植すると枳となるといふので、周禮に橘踰淮而化爲枳。と見えてをる。淮は水かの名。

ひ、べ野木瓜、木通科、山野自生の木質蔓生植物、葉は長柄を有し、三・五又は七小葉から成る。小葉は橢圓形で尖り、全縁平滑で、光澤光澤がある。花期は四五月。雌雄同株で、白又は帶紫白色。花蓋は六裂。果實は卵形で、食用になる。

第二十一課 象 狩

前課と連絡して、象の習性を示すのが主眼で、文章は叙事體になつて、史的現在法が用ひてある。

第二十二課 傳染病

傳染病につき、その原因、症狀、豫防法等を示すのが主眼で、文章は頭括式の説明文である。

八種傳染病豫防法は、明治三十年三月律法三十六號を以て公布されてゐる。

種痘法は明治四十二年四月十四日律法第三十五號を以て公布せられ、その施行規則は同年十二月二十一日内務省令第二十六號を以て定められてゐる。

血清療法、血清とは血液の凝固して出來たものである。元來微菌の有害であるのは其の産出する固有の毒物によるのであるが、或る動物はその微菌の接種により、其の體內殊に血清中に該毒物を無害に

する物を生ずるので、其の血清を人體に注射して病を治し、又は微菌に對する抵抗力を強くするのである。今は實扶的里血清が最も廣く行はれ、其の豫防又は治療に用ひられる。

種痘法摘要

第一條 種痘ハ左ノ定期ニ於テ之ヲ行フ但シ痘瘡ヲ經過シタル者ニ付テハ此ノ限リニ在ラズ。

一、第一期出生ヨリ翌年六月ニ至ル間但シ不善感ナルトキ翌年六月ニ至ル間ニ於テ更ニ種痘ヲ行フベシ。

二、第二期數ヘ歳十歳但シ不善感ナルトキハ翌年十二月ニ至ル間ニ於テ更ニ種痘ヲ行フベシ。

定期前二年以内ニ善感シタル種痘ハ第二期ノ種痘ト看做ス。

第二條 保護者ハ未成年者ヲシテ種痘ヲ受ケシムルノ義務ヲ負フ。

第三條

左ニ掲グル者ハ未成年ノ生徒院生若クハ之ニ準ズベキモノ
又ハ未成年ノ寄寓者ヲシテ種痘ヲ受ケシメ又ハ保護者ヲシテ
其義務ヲ履行セシムベシ。

一、 學校育兒院、又ハ之ニ準ズベキ場所ノ校長院長其ノ他首長。
二、 教育監護又ハ傭使ノ目的ヲ以テ人ヲ寄寓セシムルモノ。

前項各號ニ掲グル者ノ法定代理人アルトキハ法定代理人ニ前
項ノ規定ヲ適用ス。

第五條

市町村ハ種痘ヲ施行スベシ。

第八條

市町村長ハ第一期種痘ヲ完了シ又ハ之ヲ要セザルニ至リタ
ル者ヲ戶籍吏ニ通知シ戶籍吏ハ戶籍簿ノ欄外ニ符號ヲ以テ之
ヲ記入スベシ。

第十二條

醫師定期種痘ヲ施シタル者ヲ檢診シタルトキハ種痘證ヲ

交付スベシ。

前項ノ場合ニ於テ種痘證ヲ受ケタル者ノ保護者又ハ第三條ノ
義務者ハ十日以内ニ市町村長ニ届出ツベシ。

第十四條 當該吏員ノ請求アルトキハ保護者又ハ第三條ノ義務者ハ
種痘濟證又ハ種痘證ヲ提示セシムベシ。

第二十三課 軍馬の忠義

軍馬の其の主ニ忠實であつた事實によつて、愛護の精神を養はうと
するのである。

ハンニバル Hannibal (紀元前二四七―一八三)はカルセーシの將軍で古
來屈指の名將と稱せられてをる。ハンニバルがアルプスを越えたの
は、羅馬に攻め入つたときのことである。

ナポレオン、ナポレオンがアルプスを越えたのは、以太利からモスコワへ向つたときのこと、尋常讀本の十一の卷第十三課の少年鼓手の條に見えてゐると同時である。一八三〇年、賽馬集は九連城の北に在る地名で、この地の偵察に向つたのは三十七年五月下旬佐々木少將直の率ゐる歩兵第十二旅團(小倉)の吉田枝隊である。

第二十四課 萬里の長城

天下の奇觀たる萬里の長城の現状と由來とを説き、あはせて、秦の始皇帝の事跡を紹介するのが主眼である。

嘉峪關、甘肅省肅州の西に在る。

日子、日かすのことであるが、もとは日づけの意に用ひたので、南

史に、今上本無上書年月日子とあるのが出處である。

不知禍起蕭牆内。虚築防胡萬里城。唐の胡曾の詩で、起承は祖舜宗堯自

太平。秦皇何事苦蒼生。とある。一首の意は、舜を手本とし、堯を手本

として、徳を以て天下を治めたらば、自ら太平であるべきに、秦の

始皇帝は何故に蒼生人民を苦めて、大なる土工を起したのであるか。

やがて、其の宮中より禍亂の起り、二世皇帝が趙高に弑せられるや

らになることをも知らないで、いたづらに胡を防ぐために萬里の城

を築いたのは笑ふべきことであるといふのである。蕭牆は宮門の中

に在るかべのことで、蕭はつゝしむ意、臣下がこゝに至るときは、

自からつゝしむの意を起すといふので、蕭牆と名づけたのである。

論語の季氏の篇に、吾恐季孫之憂不在顓臾而在蕭牆之内也。とある

のがその出處。

焉知萬里連雲勢。不及堯階三尺高。唐の汪遵の詩で、起承は秦築長城比鐵牢。蕃戎不敢過臨洮とある。一首の意は、秦は長城を築いて、鐵の牢の如くに堅固にしたので、えびすどもも、敢て臨洮縣を過ぎて、南に侵入することがなくなつた。しかし、これを昔の堯帝が僅に三尺の高さの土の階段のついた宮殿に住まつてゐて、永く太平を致したのに比べると、萬里も長くつゞいて高く雲に連る勢のある長城も却て三尺の階にも及ばないわけであるといふのである。堯階三尺といふ語は、墨子に堯堂高三尺。土階三等。茅茨不剪。とあるのから出たので、臨洮縣は今甘肅省の鞏昌府に屬してゐる。

右の二首の詩は、伊勞の津阪孝緯の編輯に係る絶句類選といふ書の憑弔類に見えてゐるので、趣向は二首とも同一であるが、詩としては汪遵の方が優つてゐる。韻は前のは八庚で、後のは四豪。

挿繪の長城は右の方のは八達嶺のあたりを示したので、左の上にあるのは、昔の長城のそまゝ残つてゐる部分を示したのである。

第二十五課 共進會の模様を報ずる手紙

我が國の産業の發達を知らしめるのが主眼で、内容は明治四十三年に名古屋市で開かれた共進會に似てゐるが、必ずしもそれを寫し出したといふわけはなす。

第五回内國勸業博覽會、明治三十五年の春から夏まで、大阪の天王寺の附近で開かれたのを指す。

光彩陸離、光のうるはしいこと、陸離は衆い貌にも、美好の貌にも、分散することにも用ひる語で、屈平の文にも、長余佩之陸離といふ語がある。

林相、はやしのすがた。

第二十六課 四季の月

四季の月の特色を叙べて、趣味を養ふのが主眼である。春の月のおぼろに句ふさま、夏の月の短夜の空に入り残るさま、秋の月の隈なく照らすさま、冬の月のさえわたるさまをよく説き明すことが必要であらう。

春はやゝ景色と、のふ、春もやゝけしきと、のふ月と梅といふ芭蕉の句を引いたので、この句は七部集の續猿蓑に見えてをる。

照りもせず曇りも果てぬおぼろ月夜、古今集の春の部にある、照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなきといふ大江の千里の歌を引いたのである。

一刻千金の價はあれ、東坡の詩に、春宵一刻價千金、花有清香月有陰、歌管樓臺人寂々、鞦韆院落夜沈々。とあるのを引いたので、春の夜は一時間千圓の價があるといふのである。

大原や蝶の出で舞ふおぼろ月、これは丈草が京都の東北なる大原の田舎路を通つてをると、春の夜の月のおぼろにかすんでゐる中に蝶が出て舞つて、極めて優美に見えたといふのである。丈草は尾張の犬山の臣で、幼い時から和漢の學を研究し、後芭蕉の門に入つて、俳諧を學び、終に禪僧となつて、寛永元年二月に歿した人である。この句は七部集の炭俵に見えてをる。

夕立の空さりげなき月、さりげなきは然る様子のなき意で、夕立の降つたやうな模様はなく、よく晴れてをるのをいふ。新古今集の夏の部に夏の月をよめるといふ詞書があつて、從三位頼政、庭のおも

はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな。とあるのが、この語の出處である。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、古今集の夏の部に見えてをる清原深養父の歌で、夏の夜の明けやすいところをよんだのである。この歌には、月の面白かりける夜あかつきがたによめるといふ詞書がある。

白雲に羽ちかはし飛ぶかりの云々、古今集の秋の部に題しらずよみ人知らずとして載つてをる歌で、かずさへ見ゆるといふ語に、秋の月の皎々と照りわたつて、すべての物の隈なく見えるさまが知られるのである。遠鏡には、千秋の説をひいて、はねうちかはしは、いくつもつらなつて、雁と雁と羽をならべかはして飛び渡るをいへり。白雲とうちかはすにはあらずといつてをる。

寒月やわれひとり聞く橋の音、ささ渡つた冬の月を浴びつつ、唯ひとり橋を渡つて行くと、夜もいたく更け、世間が静であるため、下駄の音がすこく聞えるといふのである。太祇の句で、原文にはわれひとり行くとしてある。太祇は京都の俳人て、初世紀逸の門人である。明和八年八月九日歿。

第二十七課 盗人を誡む

袴垂の話は今昔物語に見え、梁上の君子の話は後漢書五十二陳寔傳に見えてをる。狩衣もと狩獵の時に用ひた服で、三闕腋で、袖口に括緒くわくしよを貫いて、其の緒を手首でしめくゝるやうにしてある。後世太上天皇以下六位以上の服となつた。

藤原保昌、右馬權守致忠の子、膽智勇決にして膂力が人にすぐれ、武藝に精達し、かねて和歌が巧であつた。右馬頭となり、丹後大和攝津等の守に歴任して、四位に至り、長元九年に卒した。年七十九。陳寔、字は仲弓、漢の桓帝のとき、大丘長となつた。郷里にあるときは、心を平にして、物を率ゐ、民の争訟あるものは、いつもその判正を求めたといふことである。讜議を以て有名であつたが、朋黨の禍には罹らなかつた人である。

後漢書の原文は次の通り。

寔在郷閭。平心率物。時歲荒。民儉。有盜夜入其室。止於梁上。寔陰見。乃起自整拂。呼命子孫。正色訓之曰。夫人不可不自勉。不善之人。未必本惡。習以性成。遂至於此。梁上君子者。是矣。盜大驚。自投於地。稽顙歸罪。寔徐譬之曰。視君狀貌。不似惡人。宜深剋己反善。然此當由貧困。令遺絹二匹。自是一縣無復盜竊。

第二十八課 害蟲と益蟲

農業に關する材料で、害蟲と益蟲との形態習性等を知らしめるのが主眼である。

螟蛉、一般には蝶蛾の幼虫の綠色を呈するものをいふのであるが、學術上では昆虫類中鱗翅類の螟蛉科と稱する一科をなすものをいふ。羽化して出た蛾は中形で、下唇鬚が突出し、上方に曲り、觸角は雌雄ともに鞭狀をしてをる。前翅は長三角、後翅は底圓三角形で、周縁に軟毛を列生し、概ね樺褐色で、斑紋は不明瞭である。脚には刺毛がある。

葉卷虫、ハナセセリ、イチモジセセリの幼虫で、蠶兒に似てをる。稻や竹の葉を卷いて巢を作つて、これを食ふ。

椿象、有吻類に屬し、口吻は四節から成り、觸角は五節、複眼の外に單眼が二個ある。植物の葉莖から汁液を吸収し、農家に有害である。これには、まるかめむしくろかめむしいねかめむしあかすべかめむしうづらかめむしくろくさがめ等の種類がある。泥虫、毎年二回發生、草叢の中に越冬する。自分の排泄した虫糞を背に負うて、泥のやうに見えるので、泥虫とも泥負虫ともいふ。ひめこがね、體長四五分の橢圓形の甲虫で、普通藍光色の美麗な種類である。前胸は稍方形なるも、翅鞘は短く、常に腹端を露出してをる。卵は圓形で、多少紫色を呈し、地中に産む。孵化した幼虫は、白色で、頭端は褐色、強大な顎を備へ、尾節は長大、全體に皺が多し。三對の胸脚があつて、常に體を腹方に曲げてをる。蛹は地中にある。成虫は七八月頃發生して、大豆・鵲豆・桃李・梅・柿・葡萄・櫻等十數種

の植物を害する。唯奇とすべきは大豆を害して、小豆を食はぬ一事である。幼虫は各種の作物の根と幼芽を食ひ、俗にデムシといふ。さるむふし、體長一分五厘許の半球形の黒色なる光ある小甲虫である。頭は小形で、觸角は糸狀、前胸は略三角形であつて、翅鞘は圓形に近く、九條の縦點線がある。幼虫は黒色で、一分七厘許、全體に肉狀の凸起があつて、觸れるときは、體を彎曲して落下する。サンシヨウムシといふ。蛹は圓形淡黄色で地中にある。卵は三厘許のもの一個づつ食草に産みつける。一年三回以上の發生をなすもので、第一回は八月上中旬、第二回は九月中旬、第三回は十一月上旬に出る。成虫態で、土中又は雜草落葉中に冬を越す。成虫幼虫とも各種の菜類を害するので、成虫の生命も約三百日に亘るものがある。この長期間産卵加害するので、恐るべきである。

かぶらばち、普通の蜂とは異つて、胸腹の間に縫れ目のない小形の蜂で、頭部は扁平黒色、左右に複眼の大なるのがあり、中央に三個の單眼がある。觸角と中後胸は黒色であるが、前胸と腹部は橙黄色で、翅は淡墨色をなし、靜止するときは背面に水平に疊む。體長二分五厘、翅の長は六分位である。卵は淡綠色の腎臟形で、一粒づつ葉の組織内に生む。卵は一週間で孵化し、幼虫は濃黒色の横皺の多い頭部に近い部分の肥大したもので、三對の胸脚と七對の腹脚と一對の尾脚とがある。各種菜類の葉を食ひ、物に觸れると、體を曲げて落下する。蛹は土中にあつて、堅い橢圓形の繭を作る。一年二回の發生をなすので、第一回の蜂は春四月中下旬に出て、第二回は九月下旬に出る。幼虫態で、地中に越冬し、翌春化蛹する。もんしろ蝶、一名なのはのてふは普通に見られる白蝶であつて、體

長六分餘、翅の開張二寸前後、體は細長く、翅は白色であつて、翅頂から前縁に沿うて、内半は黒色の斑紋があり、後翅も基部は黒紋がある。卵は一個づつ葉裏に産みつけられ、徳利形である。幼虫は誰も知る青虫で、密に綠色の短毛を生じ、老熟すると、一寸許になる。蛹は長さ七八分、胸部に糸をかけてゐる。瓜蠅、うりばへといつても蠅ではなく、橙黄色の體長二分八厘許の甲虫である。形状はさるはひしに似たところがあるが、胸部は稍々方形で、中央に横溝を具へ、翅鞘は胸部よりも廣く、後方がふくらんでゐる。脚と觸角との先端は褐色である。卵は數十粒食草の根元に生み、淡黄色の粟粒大のものである。幼虫は黄色で、圓筒形で、長さ三分五厘許になる。頭部の褐色な胸脚が三對あつて、作物の根に食ひ入るのであるが、蛹は地中であつて、土室内にある。一年一

回の發生をなすもので、冬季は成虫態で、雜草間に潜伏して居り、翌春五月初旬頃より出て、胡瓜、西瓜、南瓜等各種の瓜類に飛來し、網に食ふ。卵から二十日前後で生れた幼虫は各作物の根を害し、七月下旬になつて、蛹となり、一週間で成虫と化する。綿虫、有名な萃樹の大害虫で、體に綿のやうな白い毛がある。重に枝の切痕、外傷のある所を害し又根をも害することがある。天蠶、翅は通常黄色であるが、往々綠褐色、赤褐色を呈することがある。兩翅に透明な圓紋を有し、殆ど外縁に平行して褐色と白色と相半する一横帯がある。幼虫は黄綠色で、疣點を有し、其の上に粗毛を生じ、側部に銀白の點がある。楯櫟等の葉を食ひ、綠黄色の繭を作る。繭からは絹糸をとることが出来る。本邦固有の種である。柞蠶、通常褐色で、天蠶によく似てゐるが、多少翅尖の鋭い觀がある。

る。天蠶は年一回の發生であるが、柞蠶は二回發生する。明治十一年の頃支那から移植したのである。幼虫も天蠶に似て、繭は黄色である。

第二十六卷

五倍子虫、ふしむしと訓む。ぬるての樹に生ずるこぬかの如き虫で、十四節の觸角を有し、腹部は略と球形をなし、山中に自生のもの、枝葉莖又は葉背に一寸許の袋の如きものを作る。これを粉にしたのを五倍子の粉といつて、はぐるめにつかふ。まつむしこぬかばち、光澤を有し、赤黄色の蜂で、松蛄蠟に寄生する。繭は白色である。かむどきばち、小繭蜂科に屬する蜂で、赤褐色を呈し、桑の尺蠖虫に寄生するので、間接に農家に有益である。

螟虫蜂、稻の螟虫に寄生する小形の蜂で、赤褐色をなし、前翅に三

個の副前縁胞を有し、第一腹節が甚だ長く、胸部は多少側扁である。おはぐろとんぼ(蟪)山間の小川に多く、翅は黒い。

とうすみとんぼ(豆娘)緑色の細小なる種類で、草原に多い。火を誘ひ、焼き殺すので、誘蛾燈を用ひる。火を田野の間にもして、虫を誘ひ、焼き殺すので、誘蛾燈を用ひる。

捕殺、掬ひ網又は受け網を用ひて、虫を捕へ殺すもの。

駆除劑、石油除虫菊青酸加里、右炭酸でれば、石油等を用ひるのが通例である。

第二十九課 スバルタ武士

この課は希臘史に據つてかいたので、スバルタ武士の勇敢なる精神を示すのが主眼である。

死を見ること歸するが如く、死を樂むこと家に歸るが如き意、大戴禮曾子制言篇に君子視死若歸。又史記范雎傳にも君子以義死難。視死若歸。

第三十課 母の愛

教訓的材料で、舊い讀本のを修正したのであるが、原文は獨逸の讀本で、フロレンスの獅子 *Der Löwe in Florenz* とすゝめて Heinrich Verhardi 氏の作、以太利國のフロレンスに起つた出來事である。

慶應二年十二月崩御、十二月廿五日のことであるが、陽曆の一月三十日即ち今の孝明天皇祭の日に當つてをる。

身を以て國難に當らんとさへ祈らせ給へりとあるは、中庭に御して食を御斷ちになつたときのこと、當時の御製に今一首うたてやむ時ならなくに唐衣いつまであだに日を過すらんといふのがある。

第二課 英國民

頭括式の説明文で、我が國民の見做ふべき英國民の美點を列擧してをる。アングロ、サクソン、スピリオルチーといふ書と文明協會出版の大英國民といふ書に據つたところが多い。

カーライル Thomas Carlyle (一七九五—一八八二) は英國の文學家・歴史家である。エヂンバラ大学に入つて、初は宗教々育を受け、後目的

を變じて専ら文學を研究し、晩年には同大学の講師となつた。

英國人は無言の民なり、この語は大英國民といふ書に見えてをる。文物、禮法の類を指すので、左傳の桓公の二年に、火龍鬪、載昭其文也。五色比象昭其物也。とあるのから出た語である。

第三課 製紙場を觀る

製紙の順序を示すのが目的で、著者が親しく王子の製紙場を觀て、その實況を寫されたといふことであるから、工場等の參觀記を綴らせるによい模範文である。

唐檜、深山に自生する松柏科の常綠喬木で、高さは六七十尺に達する。樹皮は黄褐色、葉は線形で、材は建築器具等につかふ。

白檜、これも深山に自生する松柏科の常綠喬木で、高さは七八十尺

に達する。樹皮は平滑、黄褐色で灰色の點があり。葉は線形で、縦の葉に似てをる。材は器具製紙の原料等につかふ。旋風機、電氣その他の動力によつて器械を回轉せしめて風を起すもの。

製紙のことは博文館發行の少年工藝文庫第十編製紙の卷に委しく見えてをるが、日本百科大辭典のかみの條にも説明があつて、漉網・壓搾機・乾燥機の圖が載つてをる。その説明は次の通り。

抄紙機械は絶えず連續的に紙を抄造する機械にして、その主要部を漉網部とす。漉網部は大小數十のロールを水平に並列し、これに接觸して上部に精細なる黄銅製金網ありて、絶えず回轉す。水にて適度に稀釋せられたる紙の原質は、此の金網上に流れ、網ともに進み、その間に横の振動を受けて、纖維は互に拮合ふの裝置なり。か

く次第に原質中の水分はその網目を通じて濾過し、金網上には原質のみ殘留して、紙層を構成す。次に壓搾ロールと稱する一組乃至三組のロールありて、紙層はこれによりて餘分の水分を搾られ、更に内部の蒸氣により熱せらるゝあまたの乾燥筒面に移りて乾燥せられ光澤機にかゝり、強き壓搾によりて、光澤を附せられ、後截斷せられ、又は捲き取らるゝものとす。此機械によりて新聞紙の如きは一分間數百尺の速度にて、抄造せらるゝを常とす。

第四課 森 林

森林のおもしろさを歌つたもので、文部省で懸賞て募集した歌詞の一つである。第一二齣は曉の光景、第三四齣は晝の光景、第五齣は夜の光景。

深紅しんくと訓む。

第五課 上野動物園

事物を精細に観察し、これを寫生する法を示すによい文例で、趣味のあるかきぶりがしてある。

上野動物園は明治十五年農商務省博物局の設置に係り、珍禽奇獸を集めて、衆庶の觀覽に供してをる。動物の飼養區劃は五區。ペリカン Pelican 膜足類の鳥で、體が大きく、形が鶴に似てをる。嘴は甚だ長大。下嘴に伸縮し得る囊がある。羽毛は帶紅白色で粗く、魚類を捕へ、一時囊中に貯へて後に嚙下するのである。鶴の一聲、超群卓絶なる人の言語命令を鶴に喩へていふので、千羽の雀が噪いても、鶴の一聲で收まるとつけていふことが多い。

第六課 植物と氣象

植物の景觀の美を感ぜしめるのを主とした課で、初に植物と晴との關係を説き、次に植物と雨との關係を述べ、終りに植物と雪との關係を説いてをる。

清楚さつぱりとしたこと。楚はあざやかか意。

この課は三好學氏の植物生態美觀といふ書の一部を抄録したのであるが、原文には、植物の景觀と自然の氣象との間にはおのづからなる關係ありて、互に相依り、相助けて、以てこの宇宙の美を現出するなり。故に晴雨雪等のさまざまの氣象に對する植物の景觀に注意すれば、まことにおもしろき趣あるものなりといふ意の冒頭がある

第七課 維新の三傑

維新の大業に大なる功勞のある三偉人の人物事業を知らしめるのが主眼、て初と終は合叙體を用ひ、中は別叙體を用ひてをる。公、家くげと訓む。もとは天皇即ち朝廷をいふ語であるが、それから轉じて、朝廷の吏員をいふことになつてをる。木戸孝允、さどたかよしと訓む。

幾歴辛酸志始堅云々。一首の意は幾たびもつらい境遇をへて、わが志が始めて定まつたのである。大丈夫といふものは玉となつて碎けるのが本望で、瓦となつて身を全うするやうなことは愧づべきである。我が家に先祖より遺しおかれたちきてを他人は知つてをるであらうかどうか。子孫のためによい田地を買つて、財産を増殖するや

うなことはしないのであるといふのである。七言絶句で、一先の韻をもちひてをる。輒全といふ語は、北齊書の元景安の傳に、天保時諸元帝室親近者多被誅戮。疏宗如景安之徒。議欲請姓高氏。景皓曰。豈得棄本宗。逐他姓。大丈夫寧可玉碎。不能瓦全。とあるのから出てをるが、瓦の字は上聲の馬の韻で、平仄が合はないので、輒の字とかへたのであらう。

奉勅單航向北京云々。一首の意は勅命を奉じ、ひとり海を渡つて北京に向はむとして、汽船は黒烟を堆きまてに吐いて波を蹴やぶつて進んだが、幸に平和の條約が成立して通州から川を下ることになつて。間に船の窓の中に臥して、平かな夢を結ぶことができるといふのである。七言絶句で、八庚の韻を用ひてをる。

蓬は竹などを編んで船車などの上を覆ふとまのこととて、篷窓はその

とまを覆うた船の窓をいふ。一、上、下、左、右、の窓をいふ。去歲千軍逼我疆云々。一首の意は去年は幕府の夥しい兵か我が長州藩の國境まで攻めよせて來たが、難なく擊退して今朝は一ふりの劍を提げて他の藩へ使に出ることになつた。浮よの中の事はすべて變り易く夢のやうな心ちがするが依然としてかはらないのは我が一片の男子の腸であるといふのである。七言絶句で、七陽の韻を用ひてをる。

刺客、せきかくと訓む。島田一郎のこと、大久保利通の斃れたのは。明治十一年五月十四日のことである。大久保家、侯爵大久保利和、利通の長子。木戸家、侯爵木戸孝正、孝允の長子。

第八課 悔 状

親戚の間に取りかはされた悔状の一例で、委曲に情をつくしてをる。これによつて又腸窒扶斯に關することや病状を叙述することなども教へることができらる。

腸窒扶私は順當に經過すれば全快するのが常であるが、腦膜炎・心臓痲痺等の餘病を併發すると危険に陥ることがある。

第九課 楊子江

古來支那の文明に大なる寄與をなした來つた楊子江を紹介するのが主眼で、この流のために發達した都會の狀況がくはしくかいてあるから、これによつて南清地方の形勢を知ることが出来る。

河の左岸右岸といふ語は河口に面していふのである。
三峽、四川省に屬し、巫峽・西陵峽・歸峽を合せ稱する名である。晋書
の錦字箋には巫峽・瞿唐峽・歸峽を世に三峽と稱す。連亘七百里。重巖
疊嶂天日を隱蔽す。亭午夜分にあらざれば日月を見ず。と見えてを
る。

第十課 漢土雜話

教訓となるべき有名な雜話を集めたのである。

韓伯瑜の話は小學の稽古篇にも見えてをるが、劉向の説苑から出て
をる。

延陵の季子の出處は史記の吳世家、晏嬰のは史記の列傳で、いづれ
も十八史略にも見えてをる。

鮑宣の妻の桓氏の話は小學の善行篇、(もとは後漢書列女傳) 文天祥
の話は宋史紀事本末に見えてをる。

布子、綿布の衣の綿の入つたもの。

李羅以太利入て、元朝に仕へた人で、尋常讀本十二の卷のコロンブ
スの條にマルコポーロとあると同人である。

宗社、宗廟社稷の略で、國家といふと同意。

鮑宣の傳は前漢書の四十三に次のやうに見えてをる。

宣字子都、渤海人。好學明經。哀帝時舉孝廉爲郎。後爲諫大夫。常
上書諫爭。累歷官。至司隸校尉。光武時子孫皆見褒表。至大官。

第十一課 護國の眼と腕

羅馬の創立の際に於ける美談で、ホラチウスの話はフイフチーフェ

「マス・ストリクス」といふ書に見えてをる。エトルリヤ Etruria 古代の伊太利中部の一州で、現時のタスカニーに當る。十二の市府から成り、伊太利の原始人種の一なるエトラスカン人がこゝに勢力を振つてゐたが、紀元前五世紀頃から漸次に衰へ、遂に羅馬に併呑せられた。技藝が夙に發達し、羅馬の制度・宗教・風俗等もこの國から傳はつたものが多いといふことである。

第十二課 新井白石

徳川時代に於ける大文豪新井白石を紹介するので、一の卷の頼山陽に對すべき材料である。折焚柴の記に據つたところが多い。君侯、上總の久留里の城主土屋民部少輔利直を指す。

木下順庵は京師の人、名を貞幹、字を直夫といふ。幼いときから聰

明で、學を好み、松永昌三に學び、業が成つて、塾を京都の東山に開いて教授することが二十年、來遊するものが多く、新井白石・室鳩巢・雨森芳洲等がその重なるものである。

古史通、四卷、神代から神武天皇までの史蹟の大概を記したもので、舊事紀・古事記・日本紀等を取舍してをる。

讀史餘論、十二卷、古今天下の大勢について論述したものである。

異數、世に稀なる仕合せ、數は運命のこと。

藩翰譜、十三卷、慶長五年關原の戦の後から延寶八年まで百八十年間、萬石以上の諸侯三百三十七家の傳記沿革等を集録したものである。

白石の著書三百餘種。法制に關するものには、田制考・冠服考・職官考等があり、經濟に關するものには、改貨議・改貨後議・貨幣考等があり

文學に關するものには、白石詩草折たく柴の記等があり、語學に關するものには、東雅東音譜・同文通考等がある。

第十三課 贈物

作法に關する材料で、第一節は贈物に關する一般の心得、第二節は歳暮・中元等の贈物、第三節は手土産のことを説き、第四節はこれを總括してある。

中元、陰曆七月十五日のことて、上元（正月十五日）に對する語。

贈物の種類、水引の結び方については、家庭百科字彙に次の説明がある。

慶事の贈答には、たとひ價は貴からざるも、慶賀の記念として、互に保存し得べきものを以てするが第一なるべし。例へば婚禮又は新

宅開等の贈物には、座敷飾とすべき花瓶・置物・置時計・掛軸・額鏡・置棚等の如きもの、或は書畫帖・寫眞・挾など趣味多く、又庭園に据うべき石燈籠若しくは庭石なども動きなき千代の壽を含みて面白かるべし。

衣服類或はその附屬品なども、消耗品にあらざるを以てこれ等に次ぎてよろしかるべく、所帶道具の類即ち茶器・菓子器又は膳碗なども趣味あるべし。凶事の贈答は慶事とは全く反對にて、後に愁を遣すこと少からしめんがため、直に消耗すべきものを贈るをよしとす。されば最も便利にして、後に悲の種とならざる金員を贈るは極めて至當なるが如し。されど、特に物品を贈るべき必要あるときには、造花生花（何れも人夫附）・花環・線香・蠟燭等を普通とし、また菓子その他の食品類を用ふることあり。

水引の結び方は、紅の方を右にし、中央にて結ぶ。俗間にては、普

道の時の進物には、花結びとし、婚禮の祝物等には結び切とし、包紙も二枚を用ひ、水引も二本揃へてかけ、再び用ひざるを意味すといへり。されど、地方の習慣によりて、普通の進物にも結び切を用ふるあり、所によりて異なるべし。弔慰の贈物は、多く黒と白との水引をかくれども、地方によりては、紅白を反對に、又略して元結を用ふるもあり。いづれも結び切とす。

第十四課 會社

法制に關する材料で、第一節は會社の意義、第二節は責任と會社の種類、第三節は合名會社と合資會社、第四節は株式會社、第五節は株式合資會社、第六節は重役のことを説いてをる。

この課を教授するには商法第二編會社の條を参照するがよい。株式會社は多人數の資本を合同す。商法第百十九條には、株式會社の設立には、七人以上の發起人あることを要すとしてある。

第十五課 我國の水産業

兩括式の説明文であるが、鯛・鯉・鱒・魚等を説明するところは、それそれ句法に變化があつてもしろい。

揚繰網、二艘の漁船により網を圓形にうちまはして、魚群を圍み、網の下縁より繰上げて捕へるものである。

巾著網、米國に行はれてをる卷網の一種で、揚繰網に似てをる。網の裾に數多の環を附け、こゝに一條の網を通し、魚群を圍んだ後に環網の兩端を通した重い鉛錘を其の間に下し、其の重力によつて、

網の裾を閉ぢるやうになつてをる。

第十六課 村上義光

太平記の吉野の戦の條に見えてをる村上義光の忠死のさまを歌つたのである。

御しるしは首級のこと。

天の川はてんのかはと訓む。

義光の戦死したのは、二の城戸で、今その墓のあるあたりである。

第十七課 スエズ運河

スエズの運河の開鑿の顛末を述べたもので、レセツプの苦心のさまがよく現れてをる。

副王は土耳其帝の命を受けて埃及を鎮めてをる總督の如き官である。この材料は多くの中等学校の國語讀本に見えてをるが、そのもとは久米邦武氏の歐米回覽實記といふ書によつてかいたものである。

レセツプ Ferdinand de Lesseps (一八〇五—一八九四) は佛國の外交家また事業家で、千八百五十四年にスエズ地峽の開鑿に志し、六十九年に完成。ついでパナマ地峽の開鑿を計畫したが、成功しなかつたのである。

第十八課 埃及の遺蹟

前課と聯絡して、ピラミッド・オベリスク・スフィンクス等の遺蹟を紹介するのが主眼で、一の卷の萬里の長城に對すべきものである。

八十四頁の挿繪はピラミッドの一部。

八十六頁のはルクソール大寺に屬するオペリスク、八十八頁のはギゼイの大スフィンクスで、八十七頁の文字は西洋の百科辭典に據つてをる。

ピラミッド・オペリスク・スフィンクスについては、日本百科大辭典に次のやうな説明が載つてをる。

ピラミッド金字塔と譯す。基礎方形にして、頂一點に終る。錐形の建造物なり。或は階段状をなすものあり。其の傾斜の度一定せず。エジプトに於て最も早く起りたる建造物の一にして、ギゼーに於ける大ピラミッドは容量に於て世界第一の建築として、普く世人の知る所なり。

オペリスク、殿堂の前に建てたる一塊の石柱にして、一對をなして對立せり。其の形は方形にして、上部に進むに従ひ、漸次に縮少し

頂は兜甲形に削られ、柱面には銘を刻す。その最大なるものは、今ローマ市のセント・ジョン・ラテカンのピアツツアに在り。スフィンクス、人首獸身の畸形をなし、多くは獅身なれど、稀に羊其の他のものあり。古テーパーにはルクソールとカルナツクとの間にスフィンクスあり。最大なるものは、ギゼーの大ピラミッド附近に在りて、高さ六十尺、長さ百八十尺あり。

第十九課 文字

文字の功用起源種類等を知らしめるのが主眼である。

漢字には日月山水魚鳥の如く云々は、漢字の作り方を示したので、日月山水魚鳥の類は象形文字、本末の類は指事文字・林・森・東の類は會意文字、清・晴・精の類は諧聲文字である。

九十二頁の挿繪の上の二つは印刷文字で、下の二つは筆記文字。

第二十課 雪

雪景色の美を寫し出したので、趣味を養ふのが目的である。

夏蟲氷を知らず。莊子の秋水篇に井蛙不可語于海拘于虛也。夏蟲不

可語于氷者篤于時也。とあるのが、この語の出處。

路行く人は鶴の毛衣を着て往來すると昔の詩人は見立てたとある昔の詩人は、唐の白樂天を指すので、この詩は白氏文集に雪似鷺毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。と見えてをる。

雪やこんこ。こんこは雨雪などの降る體を形容する語である。何を釣る沖の小舟ぞ笠の雪、召波は谷口蕪村の門入で、笠に雪の降り積もるをも厭はず釣りする海士小舟のさまをよんだのである。

長々と川一筋や雪の原、雪の原に埋め残された一筋の川の殊に長く覺えるいふのである。凡兆、號は春花園、芭蕉の門人。

松原に飛脚小さし雪の暮、この句は近江の日吉山王神社の二宮の拜殿にかゝげてある句で、暮れかゝる雪の日に松原を行く飛脚の小さく見えてさびしいさまを叙してをる、芳賀一品名は治貞、崑山翁と號し、書を能くした人。寶永四年歿。

箱根越す人もあるらし今朝の雪、箱根山は天險の地であるが、今朝の雪を冒して、この難處を越す人もあらうが、嘸かしつらいことであらうと想ひやつたのであらう。

宿貸せと刀投出す吹雪かな、吹雪になやむ旅人のやう／＼宿を見つけて、やれ／＼と刀を投出したさまである。谷口蕪村は天明調の泰斗。

狼の聲揃ふなり雪の暮、雪に餌を索めかねて、人里近く寄り來る狼群の聲のすさまじい光景を叙してをる。

荒熊のかけ散してや笹の雪、深山に積つた雪に獸の跡の見えるのは荒々しい熊がかけ散したのであらうかと怪んだのである。立花北枝は芭蕉の門下で、加賀の人である。

戸にさはる音も静けし夜の雪、雪の夜は極めて静かなもので、戸にさはる雪の音までが静に聞えるといふのである。如洋は三宅嘯山の門人て、服部嵐雪の流を受けた人。

鶏の音の隣も遠し夜の雪、静なる雪の夜に隣家の鶏の音の却て遠く聞えるさまを叙したのである。各務支考は美濃の人て、蕉門十哲の一。

美しさ日和になりぬ雪の上、積れる雪の上に朝日の美しく輝くさま

がよく現れてをる。

第二十一課 ビクトリヤ女帝

英明なるビクトリヤ女帝の傳記で、その人物と事業とが、よく寫し出されてをる。

彼の外交事件の最も紛雜を極めたりし一千八百四十八年は佛蘭西が再び共和國になり、ルイナポレオンが大統領になつた年である。

第二十二課 待賢門の戰

雅文を讀む力を養ふのが目的で、平治物語を譯したのである。

陽明待賢郁芳の三門は皇城外廓の東面の門。

桓武天皇の後裔云々の語に、祖先を尊ぶ國民性が見える。

ひが目、僻目と書く。物を見違へること。

鎌田兵衛、かまだのひやうるといふやうに、のの字を添へてよむがよい。後藤兵衛以下も同じ。

見參げんざんと訓む。

左近の櫻右近の橋、共に紫宸殿の大庭に在つて、相對してをる。弓杖ゆんづると訓む。

あれ追出せといひやれば、原文には、義朝これを見て、須藤瀧口を以て、汝が不覺に防げばこそ、敵度々驅け入るらめ。彼れ速に追ひ出せと云ひ遣されければとしてある。

第二十三課 地震

地震の原因、震動の種類等について、明確な觀念を得させるのが主眼

て、第一節は地震の副因、第二節は地震の遠因、第三節は地震の直接原因、第四節は火山と地震との關係、第五節は時の分布、第六節は餘震、第七節は地理上の關係、第八節は震動の種類、第九節は日本の地震のことを説いてをる。

この課は大森房吉氏の案に據つたもので、同氏の著書地震學講話を抄録したやうに見える。

時の分布、震動後に經過したる時間の長短、季節の關係を指す。

地理上の關係、地形、地質等を指す。

陷落、地下を循環する水の岩石を溶解し、空處を生じ、上部の地盤が自己の重量によつて、陷落し、地盤を震動せしめるのをいふ。喰違、地殼の冷却に伴ふ收縮により、一部が上下に移動し、これと隣接せる部と喰違を生ずるをいふ。

挫折、地殻の一部が下方に移動せるため、隣接せる高い地殻が、側面に移動して、その上に來るのをいふ。壓縮、地殻に裂罅を生ずるに當り、上下又は左右に在る地殻が兩側より厭縮せられるのをいふ。裂罅、地殻の收縮によつて、われ目を生ずるのをいふ。

第二十四課　ビスマークの幼時

ビスマークの成功はその剛膽で、史學に精通してをるところから來てをるものが多いが、この課はよくビスマークの性格を描き出してをる。落合直文氏の中等國語讀本卷二のビスマークの幼時とある文に據つてをる部分が多い。獨逸の片田舎とあるは、シェーンハウゼンのこと、某博士とあるの

は、ブラーマン博士、十二歳のとき中學に轉じとあるは、ガラウエ
ンクロステル中學を指す。

ビスマルクの略歴は次の通り。

千八百十五年獨逸のシェーンハウゼンに生れた。その祖先は中世の騎士から出た門閥家。千八百四十七年聯邦議會の議員に擧げられ、それよりその名が漸く政治界に高く、遂に保守黨の首領となつた。

後普王ウイルヘルム一世の信任を得、擧げられて、全權公使となつて、露佛兩國に駐劄し、次いで普國々務大臣となり、やがて内閣議長となつた。千八百六十六年埃太利を破り、七十年佛蘭西を破つて、遂に獨逸帝國建設の偉勳を立てた。功によつて公爵に叙せられた。獨逸今帝の即位に及び、意見の合はないために、退隱し、千八百八十三年七月三十日に薨去した。

スバルタ流、スバルタは希臘の盛な時代にアゼンスと並んで隆盛を極めた國で、教育の風も施教の法も人民の氣象も皆剛建を尊び、全く武斷的であつた。

埃地利と戰端を開きとあるは千八百六十六年のことである。初め普魯西亞と埃太利とは互にその覇權を獨逸聯邦の間に争ひ、長く睨み合つてゐたが、シユレスウイヒ、ポルースタインのことに關して、はしなくもこゝに戰端が開かれることになつた。それから、その年の七月三日の決戰によつて、埃軍が全く破れ、普軍は破竹の勢を以て長驅し、將に埃都ウイーンを衝かうとした。埃國は驚いて、急に和を乞ひ、八月二十三日に和議が全く整うた。この役に普王ウイールヘルム一世は自ら陣頭に立つて、三軍を指揮し、ビスマルクも從つて陣中にゐた。

城下の盟、埃國が普國に破られて、ブラーグで和議を締結したのである。左傳の桓公十二年に楚伐絞大敗之。爲城下之盟而還。とあるのから出た語で、註には、城下之盟諸侯大所耻也。と見えてをる。

第二十五課 慈善

慈善の必要と慈善の心得とを説くのが主眼である。

長者の萬燈貧女の一燈。ありあまる人の多くの施よりは、貧しいものゝ赤心から出た一錢の寄附金の方が其の功德がすぐれてをるとの義。長者の佛に献じた一萬の燈明よりも貧女の献じた一燈の光が却て明であつたといふ故事から出た語である。

天は人の上に人を造らず。個人の平等なることをいつた諺で、福澤翁の學問のすゝめの初にも見えてをる。

第二十六課 看護の心得

一家の主婦たるものには特に切要なる看護の心得を示したので、第一節は看護の大切なること、第二節は醫師のこと、第三節は病室と食物のこと、第四節は薬用と体温と汚物のこと、第五節は精神療法のことを述べ、第六節は全文を結束してをる。

腸室扶斯患者が快癒期に際して云々とかいたのは、腸室扶斯患者は快癒期になると、食欲の甚しく増進するがためである。

体温器を以て体温を計るには先づ平度より二三度振り下ろし、患者の腋窩部の汗を拭き取り、靜に挿入して、五分乃至十五分を経て、(精巧な体温器を用ひれば、三十秒許でもよい) 抜き取り、その度を検するのである。若し、腋窩に障があれば、直腸又は舌下で行ふこ

ともある。体温を計るは一日三回を通常とする。餘り度数を多くして、患者の神経を刺戟することは慎まねばならぬ。

本文の外に附説すべきは、氷嚢の使用法、吸入法、灌腸法等であつて、氷嚢、吸入器、灌腸器等は必ず學校に備へつくべきものであらうと思ふ。

第二十七課 進取

進取の氣象を養ふのが主眼で、著者の創作である。

艱難汝を玉にす。 Sufferings are lessons, Greek といふやうな西洋の諺から來た語であらう。

百里の路を旅行くものは九十里を以て半とすべし、事の末一段の最も緊要なることをいふので、戰國策に行百里者半九十里。此言末路

之難。とあるのから出たのである。九仞の山を築かんとする人、功を一簣に虧くこと勿れ。仞は八尺のこと。簣は土を運ぶ籠。九仞の山を築くに一簣の土を缺けば完成することが出来ぬ。それで、積年の勞も一失の爲に敗れる喩とするので、書經の旅契の篇に、夙夜罔或不勤。不矜細行。終累大德。九仞功虧一簣。とあるから出た語である。

第二十八課 征衣上途

有名な櫻井中尉（忠温）の肉彈の一節を譯したので、城内練兵場とあるは、松山城内の練兵場、聯隊とあるは歩兵第二十二聯隊（聯隊長歩兵大佐青木助次郎氏）を指す。丈夫涙無きに非ず。

離別の間にそ、がず、唐の陸龜蒙の離別の詩に、丈夫非無淚。不灑離別間。仗劍對樽酒。耻爲遊子顏。蝮蛇一螫手。壯士疾解腕。所思在功名。離別何足歎。とある。

足良の曲。軍旗に對する敬禮の曲。

第二十九課 奉天附近の大會戰

日露戰役最後の太捷を得た奉天附近の大會戰について、我が多數の將士の奮闘の狀を示すのが主眼である。

この課は三段に分かれてをる。即ち第一段は日露兩軍の布置と我が軍の作戰計畫とを叙し、第二段は戰況を叙し、末段に至つて全文を結束してをる。さうして、第二段は更に六節に分かれ、第一節は川村軍、第二節は乃木軍、第三節は中央軍、第四節は乃木軍と奥軍、

第五節は全軍、第六節は鐵嶺その他の戰況を叙し、その中に敵軍の狀況を挿んだもので、條理が整然として、彼我兩軍の活動の光景があり／＼と見える。末段の有史以來未曾有の大戦・長戦・激戦にしての一句も千鈞の力がある。

天馬空を行く。文章の評などに多く用ひる語で、非常な駿馬の空を馳せ行くのをいふ。天馬の二字は、史記の大宛傳に、大宛多善馬。汗其血。其先天馬子也。とあるのが、出處である。

破竹の勢、積威の加はるところは力を勞せずして、容易に敵を破り得ることをいふので、晋書杜預の傳に、今兵威已振。譬如破竹。數節之後皆迎刃而解。と見えてをる。

第三十課 學校園

學校園に對する趣味を養ふのが主眼である。この課は兵庫縣明石の農學校の話をかいたもので、學友某君云々も同校の辻川教諭の直話に據つてをるといふことである。

山東菜・白菜體菜については、福羽逸人氏の蔬菜栽培法に次のやうな説明が載せてある。

山東菜、清國山東省の原産にして、菘の一なり。抑もこの葉菜は近年汎く各地に繁殖し、大に世人の嗜好に適するに至れり。その種子の始めて本邦に傳來せしは明治八年にして、内務省舊勸業局内藤新宿試験場にて購入せしを以て嚆矢とす。而して其の性質の優美なるにより、忽ち各地に繁殖し、今は都鄙の別なく殆んどこれを産出せざるなく、殊に美品を産するは尾州名古屋なるが如し。山東菜は本邦在來の三河島菜のごとく漬物即ち醃藏とするに、其の味甜美にし

緯なきを以て更に美味なりとす。ものを煮て食すれば、殊に美味なりとす。その毬葉を結成せざるものにて三河島菜の如く纖維多からずして、諸菜中の最良品とす。此の葉菜は莖身扁厚にして、直立し、葉は淡緑にして、微しく缺刻を存す。又葉面には皺綾を帯びて直立するの性あり。

白菜、清國の産にして、本邦在來唐人菜莖白菜等は蓋し其の初此の白菜より變性せしものならむ。白菜は山東菜に比すれば、莖身短しといへども、一層圓潤にして、其の色白し。是れ白菜の名ある所以ならむ。葉も亦黄白色にして、缺刻なく、葉面に皺綾あることは、山東菜より多し。此の種も亦よく栽培して成長したるものは葉毬を結成し、長圓偉大なるものを生ず。其の味及び用途も山東菜に異らず。其の葉毬をなさざるものは醃藏に供して、一層脆柔毫も莖身纖

て、其の質極めて柔脆なり。又其の能く發育して毬葉を結成したる體菜も亦清國産にして、山東菜と同時に本邦に傳來したるものなり。其の葉莖甚だ潤大にして、その本に至り、更に扁潤、恰も匙頭狀をなし、其の色淡緑とす。故に俗にさじな又しやくしな等と稱す。この種は葉毬を結ばず。然れども其の莖身は殆ど相接して、毬をなすが如し。これを食するは専らその莖身に在り。葉は小にして、美味ならず。煮熟し、或は漬物として食せば、一種優美なる味を有す。

附 録

新制第三學年用上

第一課 大和心

敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花。敷島のは大和の枕詞朝日に匂ふは、朝日に映じて、色の引き立つことをいふのである。朝日に匂ふ山櫻花としたのは、本居先生の玉勝間にも見えてをる通り花の中では櫻が一ばん美しく、櫻の中では山櫻が殊にすぐれ、山櫻の花は朝日に映じたのを日のさす方から見たのが殊に純潔であるからであらう。

第二課 櫻

吹く風を、吹く風を來なといつて止めたいと思ふけれども、みちも狭いほどに山櫻かちるといふ意。

さゞなみや、さゞなみやは滋賀の枕詞。天智天皇の昔の滋賀の都は荒れてしまつたが、山櫻は昔のまゝに咲いてをるといふのである。

松岡玄達、京都の人で有名な本草家である。初め山崎闇齋、伊藤仁齋に學ぶ。後稻生若水に就いて學び。本草學に精しく、櫻を愛して櫻品一卷を著した。延享三年歿。

楊貴妃櫻 やうきひざくらと訓む。

世の中にたえて櫻のなかりせば、世の中に全く櫻といふものがなかつたならば、花見に噪ぐこともなく、人の心はゆつくりとするであらうといふのである。

第五課 白石少佐を憶ふ

烏江水淺雕能往。一片義心不可東。昔楚の項羽が漢の高祖と戦つて敗れ、楊子江の岸なる烏江亭といふところに來たときに、亭の長が舟を裝うて、早く渡れといつたら、項羽は自分はもとく江東の子弟三千人を率ゐて、この川を渡つて來たのに、今は一人も還るものがないから、父兄に對して面目ないといつて自ら刎ねて死んだといふ故事を歌つたので、雕は項羽の愛馬の名である。この詩の出處は福澤翁の瘠我慢の説であるといふことである。

白石少佐、名は茂江、閉塞隊の一人である。

八代大佐、名は六郎、二十七八年の役聯合艦隊參謀として、各地に轉戦して功あり、三十七八年の役には、淺間艦長であつた。

拳匪、義和團のこと、清國の秘密結社の一で、外教を斥け、拳棒を練習するを綱領としてゐた。明治三十三年二月東山省に起り、官兵と合して、北京の各國公使館を包圍した。所謂北清事件の原因である。

闖入。^{かんじふ}うかゞひ入る。闖は説文に馬出門貌とある。

第六課 敵襲

そよや、物の吹かれ又揺られ、相觸れて鳴る音にいふ語、(多く夫よの意に掛く。檜の葉にそよや秋風そよぐなりと云ふ句もある。

第七課 寓言二則

道高きこと一尺、魔の高きこと一丈。佛道の發達しがたく惡魔の勢

を得やすいことの譬で、佛經から出た語である。

間切る。舟子の語で、側面から吹き來る風を斜に帆に受けしめて、其舟を遣ること。水底を現すこと。底りて、底をはたらかした語で、潮の退き涸れて、水底を現すことをいふ。

第九課 近世文章の變遷(一)

院本芝居などのすぢがきをいふ。轅耕録に、金に院本雜劇諸宮調あり、院本雜劇其の實一なりと見えてをる。

脩を成す、雛形を作ること。脩は人がた。木偶の中に機を設け、手足などの發動をして意の如くならしめ、全く人に似せて殉死者の代はりに埋めたもので、論語に作脩者夫無後乎とみえてをる。

體段、尊卑貴賤を明にする文章の形式をいふ。體段語は敬語といふに同じ。

第十課 近世文章の變遷

魯靈光、魯靈光は魯の靈光殿のこと。他の立派な宮殿の、こはれてしまつた後に、獨り存してゐた。それで、こゝには立派な人々の中の生存者に喩へたのである。後漢の王延壽のかいた魯靈光殿賦といふのが文選の十一卷に載つてをるが、その序は次の通りである。魯靈光殿者蓋景帝程姬之子恭王餘之所立也。初恭王始都下國好治宮室。遂因魯僖基兆而營焉。遭漢中微盜賊奔突。自西京未央建章之殿皆見隳壞而靈光巋然獨存。意者豈非神明依憑支持以保漢室者也。然其規矩制度上應星宿亦所以永安也云々。

餼羊、精神のない形式をいふ。餼羊は元來いけにへにする羊のこと。昔し魯の國に於て朔ごとに魯の君が餼羊を廟に供へて、その月にすべき仕事を神に告げたのに、後世に至り、神に告げるといふことはなくなつたのにも拘はらず。餼羊を供へるといふ形式のみが残つてゐたところから、論語の八佾篇に子貢欲去告朔之餼羊。とある。それがこの文の餼羊の二字の出處である。拮据、讀みにくきことをいふ。斐然其の章を成す、立派に條理の立つのをいふので、論語の公冶長の篇に、子在陳曰。歸與歸與。吾黨之小子狂簡斐然成章。不知所以裁之。とあるのから出た語である。

第十一課 智慧は小出しにすべし

馬耳東風。李白の答王去一詩に、世人聞此皆掉頭有如東風射馬耳とある。

第十二課 佐夜の中山

やはか、争かて又何としてといふに同じ。
釜、二十兩ともいひ、三十兩ともいひ、二十四兩のこともいふ。
子育観音、佐夜の中山の峠なる久延寺に在る。
逆井、さかさると訓む。
導引、だういんと訓む。按摩揉療治に同じ。血脈の運行を導くといふ意であらう。

第十八課 眞の勇者

これは、サンダーのユニオンリーダーに出てをる話で、東陽學校は假設の名である。

第十九課 岩倉公の逸事

百揆、揆はつかさの意で、百揆は百官といふに同じ。魏書に百揆均任。四民殊業とある。

第二十課 岩倉公の逸事(二)

蕭牆の内は宮中といふに同じ。蕭牆は君の門内にある屏のことで、入朝するものがこゝに至つて肅敬の意を起すといふので、蕭牆といふのである。蕭は肅と同意で、論語の季氏の篇の字面である。台鼎、三公のことで、台は天の三台といふ星に象り、鼎は鼎の三足

に象つたのもである。後漢書に信登台鼎とある。さりともとかさやる浦の藻鹽草、かやうなことは無益なこととは知りつゝも、それにしても又何かの参考にもならうかと思つてかいておく文書を誰が拾ひあげて見てくれるであらうかとの意。あり立ちは浦といふ語の縁から用ひたのである。

第十期

岩倉公の影

新制第三學年用下

第三課 しんがぼーるの旅店

萬綠叢中紅一點、多くのつまらぬもの、中に一つのすぐれたもの、あるにいふ語で、書言故事花木類の王荆公の石榴詩に、萬綠叢中紅一點。動人春色不須多。とあるのから出た語である。

第五課 小宮山内膳

温井、ぬくると訓じ。

第六課 誠

下公門軼路馬。公門は君侯の門。路馬は君侯の御召しになる馬車の

馬。軾は車の前の横木によりかゝつて敬禮をすること、君の門前を通るときは馬車から下り、君の馬車の馬に遇へば敬禮をするといふ意である。

忠臣と孝子とは不爲昭々信節。不爲冥々惰行、忠臣と孝子とは昭かに人の見てゐる處であるからといつて行を飾らず、人の見てゐない處であるといつて、しまりのない行をしないといふのである。

天知る地知る子知る吾知る。後漢書楊震傳に楊震茂才に擧げらる。四たび荊州の刺史に遷る。東萊の太守となり、郡に之くに當り、道昌邑を經、故擧げし所の荊州の茂才王密昌邑の令となり謁見す。夜に至り金十斤を懷にして以て震に遺る。震曰く、故人君を知る。君故人を知らざるは何ぞやと。密曰く、暮夜知るものなしと。震曰く、天知る、地知る、我知る、子知る。何ぞ知るなしと謂はむと。密愧ぢて出づと。あるのから出た語。

第七課 日本の農業

口分田、くぶんでんと訓む。王朝時代に國民一般に、各個人について、等分に給與した田地をいふ。

第八課 道話六則

飲食を薄うし、衣服を惡しうし。論語泰伯篇に、子曰。禹吾無間然矣。菲飲食而致孝乎鬼神。惡衣服而致美乎黻冕。卑宮室而盡力乎溝洫。禹吾無間然矣。とあるのから出てをる。

第九課 明智光秀の湖水渡り

鞍つぼ、馬術の語で、馬に乗つて、鞍の少し前か、又は後にかゝること。

第十課 良友

裂皆、まなじりを裂きて、睨み見ること。

儻來たうらいの物、偶然に出て來つたものといふ意で、莊子に物之儻來寄也とあるのから出た語。

第十一課 松平定信の交友

柳營、幕府のこと、漢の文帝のとき周亞夫といふ將軍が細柳といふところに屯したことがあるので、將軍の營を柳營といふのである。うら表かはらぬ人を友とせよこの手がしはのにもかくにも。とか

かくも、この手がしはの如く、裏表のかはらない人を友とするがよいといふのである。この手がしはは、櫛の一種で、裏表が似よつてをる。

第十三課 根分の後の母子草(一)

親る者堵とどの如し。堵はかさねのこと。

逐電、天馬脱銜。追風逐電。といふ相馬の語から起つたので、身に障ることなどの起り、住處を去つて、跡をくらまして逃げること。母子草、音便で、はろこぐさともいふ。春の七草の一で、原野に多く春夏の交、高さ六七寸から一尺許に生長し、黄い花が咲く。

第十四課 根分の後の母子草(二)

空蟬の息の中なる今宵、空蟬は現身と同じく存命中にの意。
稗官、小説家のこと。稗官は小官の意。漢書の藝文志に小説家者
流蓋出於稗官。街談巷語道聽塗說者之所造とある。己の時ばかりなる松坂縞の布子、己の時は今の午前十時頃で、一日
の二分一よりは少し前であるので、中古よりは少し新しいのをいふ。
布子は綿入のこと。松坂縞は伊勢の松坂から出る木綿の縞の名。
胴金したる脇指、胴金は刀の鞘の中程に填める環のやうな金具。
渡り中間、年時を定めて、主家を變へて奉公する中間。
亥中の比ほひ、亥中は今の午後十一時頃。

第十五課 孝 養

禮の教、禮記の曲禮に、凡爲人子者聽於無聲。視於無形。不登高。

不臨深、とあるのを指す。

范祖禹、字は五父。宋の華陽の人。嘉祐八年の進士、司馬光に従ひ
て、通鑑を修め、又唐鑑十二卷、仁宗政典六卷を著す。官は翰林學
士に至る。

たらちねの親の闇路、たらちねは親の枕詞。楊子が戒、楊子法言に、事父母。自不足者其舜乎。不可得而久者事
親之謂也。孝子愛日。とある。

第十六課 天地のたくみ

いゆき憚る。いは發語、いゆくは行くに同じ。

土井晩翠、つちのばんすゐ、英文學者、名は林吉、仙臺の人。明治
三十年東京大學英文學科を卒業。三十四年文部省留學生となつて、

ライプチツヒ、パリ等の大學に學んで歸る。今は第二高等學校教授である。

第十七課 幕府時代の歐洲行

李葡、字は普魯西、葡は葡萄牙。

挾箱、挾竹はさみだけから轉じた語。箱に棒を添へて、衣服などを納れて僕に擔はせ行くもの。

御目見みめ以上、徳川時代には、役柄により、將軍に見まえることのできるものを御目見以上といふ。

第十八課 韓國の事情

明太魚。めんたいと訓む。大口魚の類である。

諺文、おんもんと訓む。朝鮮の文字。朝鮮四代の君主、世宗莊憲王の二十八年に鄭麟趾申叔舟成三間等に命じて撰定せしめたものである。

第十九課 村上義光

搦手、城砦の裏門。敵を表から追ひ込んで裏てからめるところからいふ語。

二の御腕、肩と肘との間。

木寺、さでらとも、こてらとも訓む。

練貫、練緝ひらきの意。生絲を經とし、練絲を緯として、織つた絹布の名。

第二十課 軍人訓諭の勅諭(一)

六衛府、近衛府、兵衛府、衛門府のことで、各左右に分れて、六府であるゆゑ、六衛府ともいふ。

定國
新讀本の研究
高等科終



※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※
※※※※※※※※※※※※※※※※

著作權所有

新讀本の研究
定價金貳拾五錢

明治四十四年十一月十四日印刷
明治四十四年十一月十九日發行

著者 豊田八代
發行 前者 川一郎
東京市神田區平河岸四號地

印刷 前者 横田五吉
東京市神田區松町下七番地

發行所
東京市神田區昌平橋
學海指針社

電話下谷六一番 | 番口座三〇一二番

著先哲國
民德道

第一輯

直隸志
告誦道館記述
和譯同天詩
常陸中興鑑
和譯國史

和譯國史
和譯大日本史贊叢
和譯保建大記
和譯澹泊史論
和譯南史

第二輯

和譯武教小
和譯南史
和譯澹泊史論
和譯保建大記

和譯武教小
和譯南史
和譯澹泊史論
和譯保建大記

第三輯 (以下續出)

第一輯 定價金 壹圓
第二輯 各輯 送料金十二錢

贈從三位本居宣長

贈正一位德川齊昭(號景山)

贈正四位藤田彪(號東潮)

同 人

贈從四位三宅緝明(號觀瀾)

同 人

贈從四位栗山恩(號潛鋒)

贈正四位安積覺(號澹泊)

同 人

贈正四位山鹿高祐(號素行)

贈正四位吉田矩方(號松陰)

贈正四位佐久間啓(號象山)

贈正四位橋本綱紀(號景岳)

卷之八

東京市神田區

昭和十四年十一月十四日發行
昭和十四年十一月十八日發行

卷之八 八十分
卷之九 一冊

東京市神田區

發行所

東京市神田區

電話二六三〇〇番

國文 青年 補習用書

頃者類に從來の青年用讀本の編輯方法、資料の種類に嫌焉ならずして、其の方法種類を改めらるることを企望する説を耳にす。弊社は青年の思想を穩健に、趣味を醇潔に、文藻を暢雅ならしめんとの旨趣により、國文軌範青年補習用書として、左記の書を續々刊行せんとす。

准后親房著 神皇正統記 全一冊 湯淺常山著 常山紀談 全一冊

橘南緒著 東遊記 全一冊 鳥居枕註 吉野拾遺要抄 全一冊

同 西遊記 全一冊 同 大鏡要抄 全一冊

松平定信著 白河樂翁文集 全一冊 同 定價金十五錢 送料金四錢

(以下續刊) 各冊 定價金十五錢 送料金四錢

藤田東湖文集 伴高溪文集 荻生徂徠文集

會澤安文集 馬琴文集 駿臺雜誌

久米幹文文集 貝原益軒文集 西國立志編

新井白石文集 安藤爲章文集 雲萍雜誌

本居宣長文集 佐藤信淵文集 枕草紙要鈔

中村正直文集 室鳩巢文集

定價金 壹圓

朝比奈知泉序
生田目經徳著

家紋の由來

全一冊

定價金五拾錢

郵税金六錢

○紋章は氏族の標章なり

○紋章によりて氏族を知り得らるべし

○自己の紋章には如何なる由緒あるか

一、家紋の由來は上皇室の御紋章より下十字架紋に至る凡二百有餘の紋章を掲げて其の由緒を敘述せり

一、著者の該博なる知見と數百種の引用書とによりて歴史的起元傳説を過確明晰ならしめたり

一、紋章を擧ぐると共に姓氏を掲げたもの九百七十六以て其の本支の關係を明かにせり

東京府青山師範學校教諭

豊田八十代外五氏合著

綴方教授の研究

（全一冊）
定價金 參拾五錢
郵税金 六錢

本書は、著者が實地について多年研究せる結果を發表せしものにして、綴方教授の諸問題に涉り、その要を摘み、極めて簡明に説述したれば、實地教育家を益すること尠少ならざるを信ず。本書は、又附録として、修辭法の一斑と句讀法並に分別書方とを添へたり。

（目次）第一章 教授の目的。

第二章 綴方の要素一、内容二、形式三、技能。

第三章 綴方の發達 第一期 第二期 第三期。

第四章 綴方の内容 經驗界 他教科 處世上。

第五章 綴方の形式言 語文 字文 章。

第六章 綴方教授の方法。

第七章 文題選擇の注意 文題範例。

第八章 綴方教授の段階 豫備記述 訂

正。第九章 綴方の訂正方針 方法 處置。

第十章 綴方教授の主義。

（附）第一 修辭法一斑 標的組織 修飾。

第二句讀法及分別書方

東京府青山師範學校教諭豊田八十代著

改訂 國定新讀本の研究

前編 各一冊
後編 各一冊
四六判紙數
各二百二十頁
定價各金 參拾錢
送料各金 四錢

- 本書は昨年出版以來、高評聲裡十數版を重ねるの榮を得たり。
- 著書は實際教授の研究に基き茲に大増補大訂正を加へられ殆ど別種の感あり。
- 讀本教授上無二の參考書たれば、當局教育者には、必讀の良書たることを信ず。
- 初版發賣の本書を繕讀せられし各位には、是非とも一讀の榮を希ふ。

豊田八十代校閱 教育研鑽會編纂

國定新讀本 國語假名遣

前編 後編
各一冊
定價各金 拾錢
送料各金 貳錢

（特長）

卷首に難字の音表を掲げ、毎課別に新出文字の字音と國語との假名遣を細記し、尙參考の目を設けて既修文字の字音と國語の假名遣を記し○豊田先生の嚴正なる校閱を受けたり。

豊田 八十代 著 (明治三十九年十二月十八日 文部省検定済)

教師範
教科
新撰日本文典

全二冊

定價 前編 各金三十五錢
後編 各金三十五錢

郵税 各金四錢

豊田 八十代 著 (明治四十二年十二月一日 文部省検定済)

教師範
教科
新撰日本文典

全二冊

定價 卷之上 各金三十五錢
卷之下 各金三十五錢

郵税 各金四錢

此の兩書は師範學校並に各種の講習會の文法教科書に充てむがために編纂せり、文法を教ふると同時に作文を練習せしむやうに仕組めること、口語と文語とを對照せしめたること、品詞論よりも文章論に重きを置きたること、國定讀本と連絡せしめたること、この四點は、本書の特色とするところなり

東京府青山師範學校教諭豊田八十代著

字音假名遣一覽表

定價 金貳錢

國語假名遣一覽表

定價 金貳錢

修辭法一覽表

定價 金貳錢

日本語法一覽表

定價 金貳錢

類字一覽表

定價 金貳錢

尙美音樂會編

唱歌筆記帳

略譜各一冊
本譜各一冊
定價各金五錢
送料金二錢

(特長)

唱歌の心得○發音口形圖○音階、音名、譜表對照表○音符、休符、拍子表○呼節法○通常用記號○記入例等を卷首に掲ぐ○體裁頗る美

宇音別各歌一覽表

東京報香山神樂部...

日下部鳴鶴先生題簽
三島東宮侍講題詩
子爵末松青萍博士序

股野帝國博物館總長序
帝室技藝員川端玉章先生書
青木槐園先生著

大和の古今

國寶并に風景寫真
數十個入、振假名付
全冊
定價金四十五錢
送料金四錢

(時代の要求) 予喜其頗通時要とは、末松博士が本書の序文中にもせられた一節である。

大和の古今は、吉野行宮、南北朝事蹟、王朝以前の文明の源泉、神武建國、王化の中心等歴史的事項の豊富詳細なる説明及大和に關する地理的説明を細大漏す所なく、實地探勝、舊籍引證、以て詳説したるは時代の要求に應じたるのである。

(教室の必携) 大和の古今は、國定教科書讀本にある、
神武天皇創業 (五卷第三課)・奈良の大佛(五卷第六課)・日本の風景(六卷第一課)・楠木正行(七卷第一課)及(七卷第二課)・藤原鎌足(八卷第十五課)・日本一の物(十卷第一課)・大和巡り(十卷第二十六課)及(十卷第二十七課)・吉野山(十一卷第一課)の各課教授に於ける詳細なる説明は本書を措て他にこれあるを見なす。

(本書の内容) 奈良 ●月ヶ瀬 ●吉野山 ●龍田川 ●法隆寺
(附) 和州勝概、漢詩漢文、宮址、御陵、奈良縣古社寺、特別保護建造物、國寶一覽表

岡五郎先生序文

東京府女子師範學校教諭 堀田要三郎君

兼東京府第二高等女學校教諭 大戸榮吉君

東京府青山師範學校教諭 御園生金太郎君

校 教育研鑽會編纂

全 國 小學校教員試驗問題及解答

●尋常正教員 各科通して九百七十四ページ、問題一千八百六十題

大 (全七冊) 各科一冊定價各一冊金貳拾錢 送料金四錢

●尋常准教員 五百七十八ページ、問題各通して九百八題

各科合本定價一冊 金八十五錢 送料金八錢

水産講習所長 松原新之助 校閱 (文部省檢定済)
同 教務主任 宮崎賢一 編纂

小學校用 水産教科書

全二冊 定價 上卷各金二十錢 下卷各金二十錢 郵税各金四錢

本書は高等小學校の教科用書たらしむる目的にてかねて水産補習學校及び小學校補習科用にも適するやう水産業の主要を平易簡單に記述したるものにして其順序は季節を以てせり而して自ら漁撈製造養殖の三大綱目の系統秩序を保たしめたり而して高等小學校にては上卷を三學年に下卷を四學年に適當するものとす

發賣品概目 (目錄進呈)

日光顯微鏡

裝置一組 金貳拾五圓

金七十圓理化設備

設備品 六十六點
消耗品 三十五點

三球說明用 轉坤儀

定價 金拾圓

日本地理模型

全國揃 金五十圓
(各種地理模型目錄進呈)

各種標本模型

理科、國語、地理、歷史此外(目錄詳記)

手工科標本

製作順序十三類百卅九種
定價 金二十五圓
文部省手工教科書標準十三類三百四十種
定價 金二十五圓

手工科材料

手工用色紙、上貼用紙、粉粘土此他一式

月刊

東亞研究

每月一回一日發行
定價 金十五錢
郵稅 金一錢

支那學術の我國に入り我が道徳、學術、言語、文章に影響したること深く且大なり。獨り過去を回顧して、叙上の影響を認むるのみならず。現在を觀察するも、亦支那學術の我が徳教文學に多大の勢力を有するを知るべし。

茲に星野文學博士を會長とし、現代斯學専門の諸先生によりて、東亞學術研究會なるものを組織せられ、其の研究の發表及び時評文苑等の記事を掲ぐるもの、即ち「東亞研究」これなり。

日本報界對策

全四冊 金十圓



広島大学図書

2500015107



文庫

11

107